

教えて！先生 日本人形の衣裳に迫る

11月号

第11回
染料
— 日本茜 —

松井幸生さん
株式会社善勸商店社長
Matsui Yukio

金襴織物・裂地の製造卸商を営む。菅田屋勤兵衛から数えて13代目。京人形商工業協同組合副理事長。平成12年伝統的工芸品産業審議会臨時委員任命。翌年、伝統的工芸品産業の奨励賞を受賞した。

今月の先生



日本人形の衣裳にとことん迫る本企画。人形の衣裳に使われている文様や生地はもちろん、着せ方についても詳しく解説していきます。業界のスペシャリストを講師に迎え、衣裳の基礎から応用まで教えていただきます。知識の習得や再確認、セールストークにお役立てください！
今回は日本の色「日本茜」について調べてみました。

——「にんぎょう日本」の隔月発行によりやく慣れた気がします。いよいよ5月からは各地で展示会が始まりますから、5-6月号は発行日が早まるらしいですよ。

展示会といえば松井先生も2月の新作金襴展示会がありましたね。毎年伴戸商店さんと合同で開催されていますね。大反響だったことと思います。お疲れ様でございました。

松井さん 今年「艶やか」をメインテーマにしました。現在のトレンド、そして少し先のトレンドを予感させるものです。上品で美しく華やかな織物をご用意したので、ご来訪いただけた方にたくさんご覧いただけたのではないかと思っています。

——衣裳つまり生地はお人形の大部分を占めているものであり、全体の印象を左右するものだと思います。文様はもちろん、生地風合いや色も重要な要素になってきますよね。

松井さん 本職の織物屋としても色をひとつ一つ理解することはとても重要で、私も日々興味を持って調べています。本連載第2回は「有職の色」(2022年2月号掲載)をテーマに解説しました。覚えていただけますか？

——は、はい……。濃色や蘇芳とか禁色などに教えていただきましたよね。年齢や未婚、既婚によって着用する袴の色が異なるといったことも知りましたが、有職故実の文献には明記されていない

こともあるということでしたね。

松井さん その通りです。確か、蘇芳の色の使われ方や規範の部分について少しお話しした覚えがあります。古来の糸染めや生地染めは非常に興味深いものがあります。明治以降、日本に入ってくる化学染料以前は草木染めが主流でした。私は最近「日本茜」という染料に興味を持ちました。色は「赤」です。ただ、赤といっても深みや明るさが微妙に違えば全く異なる色味になりますから、表現するのは大変難しいですね。この日本茜という植物は歴史があります。

——そういう名称の色は初めて知りました。少し私のほうで日本茜の歴史について調べた情報を記載させていただきます。

◆日本茜の歴史

吉野ヶ里遺跡から出土した織物の一部から日本茜の色素が検出されています。『魏志倭人伝』によると、邪馬台国の女王卑弥呼が魏の王に対して「絳青縑」と呼ばれる正絹を献上したと記されています。絳は茜染めの絹布であることから、この時代にはすでに日本茜で緋色ひいろを染める技法が完成されていたと考えられるのです。

その後も各時代で茜は文献などに登場しています。

武蔵御嶽神社(東京都青梅市)に国宝として保管されている赤糸威鎧あかいとむしよろい(12世紀後期)は武蔵国府の最高権力者であった畠山重忠により奉納されたと伝えられていて、鎧の赤糸は当時の植物染料



水洗した日本茜の根っこ



日本茜を煮だして染液を作る(2回目)



日本茜で3回煮だして作った染液で染めた糸

として使われていた日本茜で染められており、1000年近く経った今でも鮮やかな赤色を保っています。しかしその染色技術は伝承されず、明治36年の補修では鉱物染料で染められ、現在はその部分が退色しています。
緋、深緋、浅緋の緋は茜で染めた色を指します。蘇芳の輸入により赤色を容易に表現できるようになったため、茜染めはやがて途絶えていきました。



第11代薩摩藩主・島津斉彬
出典:国立国会図書館「近代日本人の肖像」
(<https://www.ndl.go.jp/portrait/>)

あかね 茜色

松井さん 日本の国旗である日の丸の始まりは、茜染めと言われています。

——日の丸を誕生させたのは薩摩藩11代藩主・島津斉彬ですよ。1853(嘉永6)年11月、幕府に大船・蒸気船建造申請をする際、日本船の総印として白い帆に朱の日の丸を使用したのです。

松井さん そうです。そして斉彬は、この日の丸を日本の船印(船に掲げる旗)にするように幕府に進言しました。それを幕府は認め、日の丸を日本全体の船印とする旨を1854(安政元)年に全国に布達しました。1870(明治3)年1月27日に日の丸は日本の国旗として制定されたのです。

薩摩藩には赤く染める技術がなく苦慮しますが、斉彬の大叔父に当たる福岡藩11代藩主・黒田長博の存在が大きく役立ちます。長博が治める福岡藩に染める技術があったのです。穂波郡山口村の茜屋に伝わる秘伝の茜色は鮮やかで美しく、日の丸にふさわしいものでした。この茜染めの日の丸が日本の国旗の始まりとなりました。

野山に自生する日本アカネを染

料にし、長い時間をかけて染め上げる鹿角茜染は奈良時代から伝わります。

アカネは古くから染草として用いられ浄血作用や保温、血行促進の効果があり、赤ちゃんの産着や女性のお腰、長襦袢などに茜染が使われ、お祝いするときなどに贈られました。科学染料では出すことのできない温もりが感じられる優美な染物です。

しかし明治になると、化学染料が入ってきて鹿角茜染は衰退していきます。それを大正初めに復活させたのが、故・栗山文次郎氏という人物です。そして息子の故・栗山文一郎氏が伝承しました。

栗山家の茜染は堅牢度を高め退色しないよう、下染めを130回も繰り返し、本染め10回以上の古代技法で染め上げています。この古代技法を忠実に再現した小柄絞りの鹿角茜染です。

※鹿角茜染……産地は秋田県鹿角市花輪。自生の茜や紫根を用いた染色は奈良時代から行われていて、江戸時代に産業として発展。献上品として江戸へ送られるまでになった。

【参考】一般社団法人日本アカネ再生機構WEBサイト
(<https://japan-red.com/about/>)